

現実物語

大村伸一

ここから先は十分に注意深く進めなくてはならない。注意深く進めるには、正確に詳細に記録する必要があるだろう。記録されないことは存在しないのだと誰かが言った。だからこれから先のことを記録しよう。それが失敗と呼ばれないようにしよう。記録された行為が失敗と呼ばれるのか、それを記録する方法が失敗だったと評価されるのか、それはいずれ明らかになるだろう。いずれというのはこの記録が終わった後という意味であり、この記録の中で判断されることではない。この記録の中で判断されることなど何一つないはずだ。内容と方法以外のこと、たとえば、記録を解読する者のことや、記録の媒体が何であったか、あるいは、記録に要した時間と解読に費やされた時間の関係などについては、失敗も成功もありはしない。内容と方法以外については誰も気にしないだろう。

これまでのことも記録しておかなくてはならない。そう決めたのだから、これからのことはここに記録されるだろう。ここから先のことについて十分注意深く進めるのだとことさらに表明すれば、それではまるでこれまでがそれほど注意深くなかったということになる。これまでのことをもう一度注意深く記録し直そう。それは以前からも注意深く行われていたという記録である。これまでが本当に注意深さに欠けていたのかというところではなく、これまでも十分に注意を払ってきたのだということを証明するため、それを記録しなくてはなるまい。

「三丁」と名付けられていた。これまでなら「三丁死乏」であるとか「二丁三丁」と名付けられていただろう。だが、ここでは「三丁」とだけ名付けられ、それ以外の何者でもない。どのように名付けられていても、名前も名前によって名付けられているものも、その正体を知る手がかりになるはずなどないのだが、それでも名前というものは重要だ。正に、注意深く名付けられなければならない。三丁は注意深く名付けられている。そのことはこの記録の中でいずれ証明されるだろう。そのことというのは、注意深く名付けられているということだ。それ以外ではない。

三丁は砂浜に立っている。少しでも身体を動かせば足の下に踏みつけている砂が安定を失い、立ち続けられなくなり砂の上に手をつけて倒れるだろう。新品の上下は染みなどなく倒れれば付着した砂が服にとって初めての汚れとなる。彼の服にとっての最初の汚れになる。雲に覆われた空は雲に覆われていて雲というものはいつも何かを隠すために存在しているのだと三丁は気づく。それ故に、雲の不安定な形態は常に変化し続けしかしその変化がどのようなものなのかは説明できない。説明できないのにも関わらずそれが雲であると三丁には

分かる。分かりはするがそのような存在である雲をどうして雲でないものと区別ができるのか、三丁には分からなかった。雲が太光球を隠していることは幸運だった。夕方から二時間、身動きをしないでいるために身体中の筋肉の動きに気をつけ続け、三丁は少しも動かないでいる。もしも太光球が出ていれば、その熱によって汗が服に染み、砂浜に膝をつくまでもなく服を汚していたはずだ。三丁がどんな服を着ているのかを三丁は気にする余裕などない。姿見どころか鏡ひとつない砂浜では、自分がどんな服を着ているのかは分からない。俯いて服を確かめようとしたり、腕を持ち上げて袖の生地やその色を確かめようとしたりすれば、たちまち身体の均衡を失い、砂浜に倒れてしまうはずだ。

砂浜に風が吹いていないのはちょうど凧の時間だからだろう。凧が二時間も続いているので、鳥は空を飛び続けることができず、次々と海面に墜落してゆく。海に生息する鳥はどれも同じ種であり、同じ声で鳴く。ただ、その鳴き声は見た目よりも遠くから聞こえるように小さく、気をつけていても聞こえない。風が凧いでいるせいだ。風がなければ、鳴き声はどこにも運ばれることがなく、砂浜には決して届かないだろう。鳥は小さいものもいれば、人が乗っても飛び続けられそうなほど大きなものもいる。右から左へ左から右へ、頭を動かすことのできない三丁の視界の中を鳥は横切り、その軌道はすべて海面への墜落軌道になっていて、果たして鳥が水面に激突しあげる絶叫がかすかに聞こえ続けている。二時間前に最初にその声を聞いた時は驚きもしたが、今ではそれは自然現象の一部となり、もはや意識を向けることすらない。よほど注意を注がなければ絶叫が起きていることにも気づかないのは、慣れてしまったからではなく、やはり風がないからだろう。凧が二時間も続いているのに、いっこうに風が再び吹き始める気配もないので、本当のところ、海には最初から風などなかったのかもしれないと三丁は考え始めている。風のひとつもない海には、おそらく波もないのだろう。この二時間というもの、目の端に見える海面には白い波頭はひとつもなく波音も聞こえてはいなかった。これでは海ではなく、巨大な水たまりではないかと考えたのは一時間前のことだった。そのときは気づかなかったが、水たまりがこんなに巨大であったなら、それはやはり海と呼ばれるべきなのだ。海ではなく湖であるという可能性もあるが、目の端に映る水面はずっと先まで何の障害物もなく続き、空乏に変わっている。それならそれは海以外にはありえない。もしもその水を舐めてみることであれば、海なのか湖なのかは簡単にそれと分かるだろう。とはいえ波のない水面に近づくこともできず、波がなければ波打ち際もないのだから、水に指を触れることはできなかつただろう。水面だとばかり思っていたが、それは水ではないのかもしれないと三丁は気づいた。三丁の知っている水は柔らかく、目の端に映っているようにゆがみのひとつとしてない水面は知らない。海と空乏の境目である空水直線は空乏を隠している雲によって空乏と同じように隠されている。だとすれば、そんな境目など存在せず、海だとばかり思っていたものは本当は空乏ではないのだろうか。確かに、空乏には波はなく、鳥が落下するとすればそれは海ではなく空乏なのに違いない。

空乏のことを「空乏」と呼び始めたのは誰だろうと三丁は思った。何か違う名前であっていいような気がしてならない。しかし空乏は「空乏」だった。「空乏」とは文字の上からは「空虚が乏しい」という意味である。三丁の記憶に残っている「空乏」は他ならない「空虚」であり、それは決して「空虚」が乏しくはなく、どちらかと言えば「空虚に満ち」ていた。だとすればそれは「空満」とでも呼ぶべきだ。しかし「空満」という言葉を三丁は聞いた事が無かった。そんな言葉がないことを三丁は承知しており、それ故にそんな名前でも示されるものも存在しないだろう。三丁がそう考えたとしても、雲に隠された空乏は雲に隠されていて一部分も見えはしなかった。見えていないものは存在しないと同時に、何であれ存在しうのだから、空乏は空乏またはそれ以外の何でもありうると言える。そして、あの海が空乏であるとしたら、三丁は最初から空乏を見ていたことになるが、それを確かめるためには三丁はもっと海に、あるいは空乏に近づかなければならないだろう。三丁は眼球だけを少し動かして、雲の切れ目を探してみる。雲には切れ目はなく雲は空乏だけでなく空水直線も完全に隠しており次第にその容積を増しているから、いずれ雲は海を覆い尽くしこの砂浜にまで達するのではないだろうか。海から聞こえるはずのあるいは空乏から聞こえるはずの聞こえない何かの音をいつか聞いたことがあるような気はした。しかし、その音はいつまでたってもあいまいではっきりと聞こえることはなかった。

不安定な砂浜の上で均衡を保つために身動きができないなどということがあるだろうか。いっその砂の上に身を投げ出せば、それ以上倒れることなどできない程に倒れ、そうすればもはや「倒れる」ことなどできない状態になるのであり、それゆえ完全な均衡に身も心も委ねられるはずだ。ではなぜそうしないているのだ。新品の服のために何時間も身動きせず筋肉の痛みや呼吸の苦しみに耐え続けるなど馬鹿らしい話だし、三丁のように短気な者にはそのような時間に耐えられるはずがない。だから三丁は自らが砂の上に立っているわけがないのだと気づいた。確かに三丁は何か重いもので全身を押しえつけられていて、身動きすることはできない。腕は丁度胸の前あたりにあるが、それが頭上にあげようとしているのであれ、膝の上におこうとしているのであれ、それ以上移動させることはできない。あげることもできなければ下ろすこともできない両腕は何か抱きつこうと前に伸ばしたまま静止したかのようにも思えるが、かといって何か抱きつくこともできはしない。右足はこれから歩き出そうとするかのように中途半端にあげているが、身体の重心を前に移動できないからだろう、右足は一センチたりともおろしたり前に出したりすることができない。左足は右足よりも下にはあるが、その足の裏には固い大地の感触もなくあたかも空中にあるかのようだ。そして、腹を押しえつけられているからだろう、浅い息はできても深呼吸はできそうになかった。肩も背中も頭も強い力によって固定され、どこにも動かない。何も見えないのは目を閉じているからだろうか。それとも何か目を覆われているのかもしれない。少し開いた唇から口の中に忍び込んでくる何かは舌に触れると唾液を少しずつ吸い取っていくようだ。唾

液のない舌は味を区別することもできなくなっている。口を動かそうとするたびに、何かが舌を伝い喉に忍び込んでゆく。一度開いてしまった口は閉じることができず、閉じようと動かせば意図とは反対に少しずつ口は広げられ、喉の奥を探る指のように何かが入ってゆく。咳き込みそうになっても身体を動かすことができないので、身体の内部が痙攣するだけだ。その痙攣に合わせるようにただ何か熱も味もない塊が喉の奥の方へ進んでゆく。肺と食道のどちらに侵入していくのか、動けない身体では肝心なことは何も分からなくなっていた。

死んでしまうのだろうか。三丁はそう考えた。肺がなにかでうめつくされ、息もできずに死ぬのだろうか。それとも、食道から胃袋へと得体の知れない塊が押し込まれ、消化もできず栄養も摂取できず体内を正体の分からない物質に満たされ丸々と太った栄養失調の肉塊となって自分は死ぬのだろうか。「死」とはもっとも遠い存在であるはずの三丁は、そのような「死」の可能性を想像しようとして何も想像できなかった。想像に欠けている今の状態こそ死と呼ぶのにふさわしいのだと思える。その認識は、真実であることは疑いなかったが、ではそれがどれだけ真実であるかについて、体験が欠けているからだろう、全く知ることのできない類の真実であった。三丁はなにも見えず身動きもできず、おそらくこれでは時間も何か違ったものになっているはずだった。時間は一人一人異なる体験であり、個人的な出来事であるが故に比較することはできない。もしもその個々人の体験である時間をすべて集めたとしても、そこに含まれない誰にも体験されていない時間というものがあるだろう。主観に欠けた時間こそが、三丁の時間体験に最も近いのではないか。三丁はそう想像した。そういった想像を試すことでだけ、三丁は自分の存在を確信できた。確信できると考えた。想像することが肝心なのである。そこで三丁は八色のことを想像する。

ここが君の仕事机だと言われました。机の上には工具と幾つかの部品が四と三列に並べられていました。机は金属で作られていて頑丈に見えましたが、下を覗き込むと、机の足には細かい傷がたくさん残っていました。何かにつつかってできたような白いこすれや、ナイフでえぐったような傷跡でした。それでも、作業をする机の表面は、毎日磨かれているらしく光り、指や腕の脂の跡さえ残っていません。机の表面を確かめようとして顔を近づけると、頭のすっきりとするにおいがしました。仕事中に眠ったりしないように、心を明瞭にするための薬が使われているのだろうと思いました。翌朝、最初にする仕事は消毒薬で机とその周辺をきれいにするのだと教えられたので、あのおいには消毒薬のおいだったのだと、そのとき分かりました。

仕事を教えると言われて、部屋の一方の壁に立てられた大きな部品棚から、箱を抱えて自分の机まで運びました。箱の中身はどれも同じで、小さな顔が二列十段印刷された鉄板です。鉄板と一緒に入っていた手順書に従って、作業機の一番手近にある鉄鋏を手にとって鉄板を切り、顔を一つ一つばらばらにしました。それから、切り取った鉄片の縁にできた、手を触れれば指を切ってしまうように飛び出した刺を、ペンチでひとつひとつつぶしていくのです。

そうして触っても安全な状態になった鉄片を「出来上がり」トレイに並べます。並べられた顔はどれも同じ笑顔でみつめているので、ずっと自分が監視されているような気持ちになりました。

鉄板ごとに顔は違っているのですが、数は決まっていてどれも二十でした。違う顔なのに笑顔は全部同じに見えるので、きっと一人でいろいろな顔をしてみせているのだろうと思いました。その顔を他で見た事はありませんでしたが、これほど大量にバッジを作るのなら、きっと有名な人物なのだろうと思います。それでも、自分の顔がこんなにたくさん作られていると知ったら、自分ならきっと気がおかしくなるのに違いありません。そう考えて気づいたのですが、この顔の人はもう気がおかしくなっているのです。だから、こんなに同じ顔で笑っていられるのです。そう気づいたとき、できあがったばかりのバッジを一つ、思わず手を滑らせ机の下に落としてしまいました。バッジは机の足に当たり、部屋の隅に転がって行きました。何かに当たるたびに明るい音を立てるのです。その音は意外なほど何回も続いて、その音は部屋の中に反響したので、音が消えた時にはバッジがどこに転がっていったのか見当がつかなくなっていました。拾ったほうがいいのか、そのまま作業を続けたほうがいいのか、手順書にはその場合の指示は書かれていなかったもので、座ったまますこし考えなくてはなりません。しばらく考えてバッジの後を追いかけることにしました。最初、部品棚のほうに転がったバッジは、棚と反対側の壁にあるドアの前で見つかりました。床中を探してようやく見つけることができました。

回収係が「出来上がり」トレイを三十二回片付けて行った後で、今日の仕事はこれで全てだと教えられました。それから、ここで休むようにと案内された部屋にはベッドが六つあるだけでした。「八色」という名札のはってあるベッドにあがると、ノートを取り出して船長の話の続きを書き始めます。部屋の灯りが消される時間になるまで、書き続けました。

夜を徹して貨物を積み込み七名の下船(到着時)そして新たに五人の乗客を乗せそうといったすべてが完了していることを確認すると時間になったので出航を命じた。この船の船長になって以来時間に遅れた者を待った事は一度もなかった。先代の船長が最も大切なものは時間だと教えてくれたからだ。裏裏港から外海に出ると後は陸地を左手に見ながら操舵をするだけだった。一等航海士に後をまかせて船長室に戻った。テーブルの上に食事が用意されていた。食事には昔から興味がなく、裏裏港で手にいれたらしい肉厚の海産物の名前も知らなかったし、それが海で獲れる海産物ではなく、つまり海産物ではないことも知らなかった。食事を済ませると胃が重苦しくなり、壁に手をつきながら船医を探した。船が揺れるたびに胃が膨れてそのまま膨れ続けたら腹が裂けるのではないかと思った。通路で見つけた船医はいつもの白衣を着ていたので見つけられた。船長どうしましたかと言いながら脈を取り舌を引っ張り腹に拳骨を当てた。聴診器よりも拳骨の方が良く分かるのですと言いつつ舌を引っ張られたからか腹を殴られたからかそれとも両方が効いたのかもしれないが胃は

直ぐに膨張をやめて苦痛もたちまち消えてしまった。苦痛の消えた様子を見て取ると今日は安静にすることですと船医は言い葉さえ出さなかった。食事をしなくてもいい口実ができたので上機嫌で甲板に出ると新しく乗船した客が船長だと気づいて名刺を差し出し話しかけてきた。天気がよくて幸運でした。思ったよりも揺れないのですね。外国の海の話聞かせてください。次の港には何時に着きますか。海鳥は食べられますか。乗客に何か質問されたとき船長は客室係に聞いてくださいとだけ答える決まりだった。そうすれば客はすぐに飽きて離れてゆく。船尾の方で若い娘が何か紙切れを空中に捨てていた。それを見てあわてて部屋に戻り机の引き出しから八つ折り版のノートを取り出すと昨日の最後に続けて船の旅は傷心旅行には最適だと書いたがそれから一時間の間続きを一語も続けられなかったのもその文の上から線を引いて消し改めて続きを書き始めた。

目の前に立つ山の山は、目飲の顔を見上げ眉を釣り上げ目を細めた。上下の唇を縫い合わせている太い脳吐糸が、漫画の笑い顔の歯のように見え、最初は笑っているのかと思った。それは狂人の笑いにしか見えない。山の山は初場所だと教えられている。初めて縫ったからだろう、唇の上下に点々と残る縫い目にはかすかに赤い血が滲んでいる。うちの相撲では止血は完璧で土俵には血の一滴も落ちることはないのですよ。脳兎理事長の言葉を思い出したが、今にも滴り落ちそうな血の粒を見て、目飲は気がかりでならなかった。

山の山のその表情が威嚇だと気づくまでにはまだしばらくかかった。最初は子供が拗ねているようにしか見えなかった。顔や肩、背中、身体中から湯気が昇っていた。よく手入れされた白い肌はなめらかで触れれば手が滑って捕まえられないだろう。まともに組み合うことは難しそうだった。

山の山は十二歳になるまでは輪廻区の情動町で育ち、喧嘩に明け暮れていたが無敗を誇り、大人でも敵わないと噂されていた。十二歳の誕生日には身長は二メートルを超え、もはや歯向かおうとする者は誰一人いなかった。四歳までは体が小さく色白であったため、近所の子供達から女の子のようだと言われてはいた。しかし、そのころもすでに腕力があり、牛小屋を張り手一つで倒壊させたという噂があるにもかかわらず、見た目のせいだろうそれほど怖れられてはいなかった。牛小屋ではなく兎小屋だったのかもしれない。

身体を大きくするために、プロテインを大量に含む脳吐塩を一日に一升舐めた。脳吐塩は、塩とは言ってもかなり甘い。子供達は親の目を盗んで脳吐塩に群がり夢中で舐め続ける。そんなに塩ばかり舐めていたら身体が溶けてなくなってしまうと親は皆脅すのだけれど、子供はまるで舌だけでできているようなかのように塩の樽に頭を突っ込んで舐め続けるのだ。

山の山にとって脳吐塩は目覚しい効果をあげ、一年もしない間に身長は二倍になり、筋肉は見事に太くなり全身をうねった。身体が大きくなっても反射神経が衰えはしなかった。それは脳吐塩に含まれるナトリウムの効果である。

十三歳の時、すでに人生に倦んでいた山の山は、毛杵口親方に見出され力士になった。無敗

山の山に初めて土をつけたのが、毛杵口親方だったから、山の山は泣きながら親方に連れられていった。毛杵口親方の稽古は厳しく、毎日、数えきれない程投げ飛ばされ土俵の土を舐めた。土俵は何百年もの間脳吐塩を吸い続けていたのでとても甘く、山の山はわざと土俵に頭から突っ込んで、子供のように土俵を舐め回した。負け続けるということが、このように二重の意味で山の山を育てたのである。

山の山の目の前に横角が立っていた。なんだ、すこしも強そうじゃないなと思ったが、親方にそう言う顔を張られた。みくびってはいけない。勝ち名乗りを受けるまでは勝ってはいないのだと当たり前のことを言われた。

四股を踏む。大きく開いた足の先端が自分の支配する空間の境界を描く。大きく伸ばした両手の指先が、自分の支配する空間の境界を描く。四股を踏み自分の支配する空間を拡張する。より広い空間を支配すれば戦いは有利になる。

対戦者を見る。やはりそれほど勝利への欲望も感じられないし、かといって自らの勝利に自信があるようにも見えない。奇妙だった。こんな相手は見たことがなかった。

行事が「った」と叫ぶように宣言した。その瞬間、山の山は右の張り手をくりだした。

目飲に意識があったのは行事が何かを叫んだところまでだった。次の瞬間、こめかみから全身に衝撃を浴びてわけが分からなくなっていた。後で気づいた時には、土俵に上がるまでの事しか覚えていなかった。忘れてしまった記憶の中で、目飲は顔に衝撃を受けた後、一瞬で視野に行事の烏帽子が映り、それは空中から見た景色のように思えたが、観客席の派手な服をきた老女と、その後ろの席の握り飯を口に頬張った中年の男の額の痣がやけにはっきりと見えた。空中を回転しながら眺めているような気分だった。それと同時に、行事の軍配が自分に向けられたところも見ていた。行事の向こう側に、山の山が悔しそうな顔で土俵の土を一握り手に取り、口一杯に頬張るところも見えた。

病室には三つのベッドを隙間を空けずに並べた特別製のベッドが用意されていた。相撲取りのサイズはないのですと医者が言った。目飲は気にしなくても構わないと答え、普通のサイズでいいからノートとペンを用意するように頼んだ。ノートを開き、目飲は続きを書き始めた。

これは十分に詳細で正確な記録だろうか。気をつけてはいるのだが、分からなくなる瞬間がある。身体の内側に詰め込まれた砂は、それは砂以外ではあり得ない。舌の上のざらざらとした感触と喉の奥の苦い味は、まさに砂浜の砂以外のものではありえない。身体の内側のかつて内臓だったすべては砂で作った胃や腸や肺やコーカサス帯やその奥のマダム婦人の長髯などに変ってしまった。砂に含まれている豊富なミネラルのおかげで内臓の機能は維持されている。それでもこのままでは三丁は砂人形になってしまいます。そう考えて吹き出しそうになった。砂丘に来る前、理髪店で髪を刈ってくれた主人がそう言ったのだ。主人の顔はもう覚えていないが、その妙になまめかしい声音は覚えていた。理髪店は国道から海岸へと

分かれた道の途中にあった。あたりに民家も工場もなく、理髪店一軒だけが建っていた。客が来るものだろうかと思ねると店の主人は祭りの夜なら客は来ると答えた。祭りは年に何回あるのだろうかと思ねたが、それは尋ねなかった。店に駐車場はなかったが、店の周囲は遠くまで空き地だったので客はあたりに気兼ねなく駐車ができる。理髪店にたどり着くまで一時間は民家を見なかった。理髪店からは港が一望できた。港に遮られて海は少しも見えなかった。理髪店の主人に海には行くのかと尋ねると、海は見たことがないと答えた。理髪店の主人に海には行くのかと尋ねると、祭りの夜には必ず行くと言った。見たことがないのに、そこが海だと分かるものだろうか。客が大勢来るから、海に行くのはずいぶん遅くなると主人は言い訳をした。それで、この男は海を知らないのだと分かった。海の表面には海鰻と呼ばれる現象が発生していて、老人たちが、男も女も早朝から海に出ては海面にはいつくばり、海鰻を海から筆取り朝食のおかずにする。老人なのでそんなにたくさん食べることはできないから、余った海鰻を市場で売ってこずかいにしていた。そう話すと主人は、あんなに苦いものを食べるのか。老人にはなりたくないものだと言った。

理髪店の主人は背も高く腹も出ていた。髪を刈るとき、腹が邪魔で自分の手元が見えないから、仕上がりは運しだいだよと嬉しそうに言った。それで、髭を当てるのは断って店を出ることにしたのだ。道はすでに夜に属して昏くなっていたが、空はかろうじて昼にすぎりつくように青く光っていた。やがて空も夜の色に塗り替えられ、闇の中の道を十メートルおきに光る鉄塔の灯りを目印に海へと歩き続けた。何かを引きずるような音に気づいて、鉄柱の陰に隠れた。それは人より大きな魚が頭は空に向いたまま、尾びれで立って歩いて来るのだ。尾びれで身体の均衡を保ち道を歩き続ける魚を目の前に見ながらも、尾びれで身体の均衡を保ち道を歩き続ける魚がいるとは信じられなかった。鉄柱の陰に隠れたまま歩く魚をやりすぎし、通り過ぎた魚の背後を確かめて、ようやくそれが若い女がその魚を抱きかかえているのだと分かった。魚が大きすぎるので女は子供のように見えた。精一杯伸ばした腕が魚の腹鰭を掴んで、ともすれば倒れそうになる魚の身体を精一杯支えている。鉄柱の灯りに照らされて、魚の鱗が女の腕に深く刺さっているのが見えた。おそらくナイフのように鋭い縁をした鱗は、腕の動脈を何本か切断してしまっているのだろう。血があふれ鱗を赤く染めていた。女の血は道路に滴り、魚と女の来た方向からずっとその跡が続いていた。腕だけではなく、魚を直立させるために魚の背中に押し付けている女の顔の右側は、鱗に肉を挟まれて血が溢れ、首から胸のあたりまで真っ赤になっていた。道路の血の跡に右頬の血液も混じっているはずだった。女の血だけでなく魚の血さえ混じっているはずだった。

魚を抱えた女が暗闇の中に消えると、三丁は魚と反対の方向にまた歩き始めた。海の波の音が遠くで聞こえた。海に近づいていることは確かだった。どこまでも同じ闇が続くので、何か想像しなければ心までもが闇に消えてしまうように思えた。三丁は八色の続きを想像した。

工場に来てから何日になるのかを覚えておくために、机の足に毎日小さな瑕をつけていました。誰に教えられた訳でもないのですが、いい考えだと思ったのです。「誰に」といっても工場では他に誰にも会いませんでした。ベッドは六つありましたが、他のベッドを使っている人を見たことはありません。通路でも誰にも会いませんでした。工場で働いているのは自分だけなのかと尋ねると、数えきれない程の工員が働いていると言われました。それで、時間をずらして働いているのか、それとも工場が想像できないほど大きくてみんな遠くに離れているから、他の工員とすれ違うことがないのだろうと思いました。部品棚の部品は毎日変わっていて、いろいろなものを作ることができました。時には、二種類の部品が見た目では同じ形の箱に入っていて、作業机で箱を開けて初めて自分がどちらを作ることになるのかが分かるという事もありました。賭をするのに丁度いいと教えられたものの、一人では賭になりません。多かったのは力士の髻のカツラでした。大人の頭には入りそうにないくらい小さいカツラでした。部品の箱の重さが同じくらいで、よく当て間違えたのが土俵の俵です。塩をよく含みずしりと重いのに、部品の箱に入れるとカツラと変わらない重さなのです。俵は百八つを丸く並べると脳吐相撲の土俵になりますから、とてもたくさん作りました。作ると言っても型紙に合わせて藁を切り、接着剤で固めるだけです。ただ、少しでも形を間違えると百八つ並べた時に完全な円にならないので、ひどく叱られます。だから、カツラを作る方が気楽なのです。カツラを作る時は髻を結うのに少し力が必要ですが、髻に染み込ませる脳吐油の匂いを嗅いでいると少しも疲れませんでした。その仕事の後は目が冴えて、消灯時間になっても眠れないので、船長の話を書き続けるのです。

正午を過ぎると波が大きくなり船は上下に移動はしても前にはなかなか進まなくなった。上空に雲がひとつもないのはすでに嵐の中心に入ってしまったからではないかほら水平線は直線ではなく直線に小さな刺が生えているように見えるではないかと乗客たちは騒いだ。乗員たちもそんな水平線を見たのは初めてだったが船長だけは違っていた。乗客には客室から出てはならぬ窓から海を見てはならぬと命じ乗員には救命艇の準備さえさせた。座礁を避けるために陸の見えない沖を進ませ難破したときのために無人島の近くを通る航路を選択した。船の時間はゆっくりと進んでいたが波はその何倍もの速さで時間を押し流しているようだった。波に生えた刺が船底を削り取るような音を立てはしたが幸い一名も失うことなく船は水平線に沈む直前に裏裏裏港に入ることができた。

夜になると大声で話す男が船長室を訪れた。今夜はここで泊まるというのか船を出してくれ明日の朝までに裏裏裏裏市に行かなくてはならぬのだ嵐でもないのに夜停泊するなど旅客船とは思えない。海のことを何もご存知ないようだから教えましょうどのような船であれ夜間に海を航行することは禁じられていますあまりにも危険だからです。この船をもう一隻買えるだけの金を出そうと言っておるのだお前は臆病者なのか。男の失礼な言葉に船長はまったく動じずどうしてもとおっしゃるなら他の船でお行きなさい船賃はお返ししますと

さえ言った。男の狙いはそれだったのかもしれない。そう言われると男はこみ上げる笑顔を無理やり隠すように唇をとがらせ不愉快そうな表情を浮かべて部屋を出て行った。それから三人の客室係にそれぞれ大きな荷物をタラップの下まで運ばせチップすら渡さなかったという。船長はうんざりしながら夕食はやめて力士の話の続きを書き始めた。

目の前に立つ北闘湾は、目飲に興味などないかのようにそっぽを向いて四股を踏んだ。少し上下を違えて縫い付けた唇は、対戦相手をあざ笑うようだ。相手を挑発するために、あえて一つつつ縫い目を違える力士は多い。さすがに横角ともなるとそんな品のないことはしないが、どんな手を使っても一勝をあげたい輩はいるものだ。北闘湾は今年百十七歳、脳吐相撲の歴史の中で最も年長の相撲取りだ。その年齢にもかかわらず毎場所勝ち越しを続けており、今も裂分の地位を維持している。どうやったらそんな年齢になるまで相撲を続けられるのかと誰かに聞かれた時、北闘湾は負けにとはんふんどと答えた。昔の言葉であり、今では誰にも通じない。その歳なら大抵、魂の抜けたような顔つきになるものだが、北闘湾には魂がたっぷり残っていて闘い続ける限りそれを失うことはない。

老人特有のぎこちなくゆっくりした動作で、北闘湾は土俵に手を付き、行司の合図を待つ。

行事が「った」と叫ぶように宣言した。それから、どっこいしょと言いながら、北闘湾は前に倒れ込むように突進し、目飲の身体にぶつかって来た。額と額が激突すると、はじき返されることもなく、そのままお互いの頭が融合したかのように額をくっつけあったまま腕を取り合う。北闘湾の動きが緩慢なので、目飲は相手の技を躲すことができた。ただ額が離れず、相手の動きは目の端で追うしかない。それは相手も同じことだ。相手が右の腕を突き出してくるとそれを左手ではじく。動きの止まったその右腕の手首を取ろうとすると、手首を返してこちらの腕を掴もうとしてくる。左の腕と右の腕が別の生き物のように動き、争いを続ける。それにしてもなぜ頭が離れないのだろう。そう考える余裕さえある。

捕らえた北闘湾の左手首は鍛えているとはいえ老人の腕であり、力を混めれば砕けそうだが、抗う北闘湾は力を緩めることを許さない。思わず全力で握りしめ、動かないように内側に引きつける。その瞬間、北闘湾の腕がぐしゃりと音を立て、前腕部から力が抜けると同時に、手のひらがこちらをむいたまま肩のほうに曲がった。折れた。そう目飲は思った。

気づいた行司が即座に目飲に軍配をあげた。腕が折れたのでは勝負は決している。老人の腕を折ってしまった後味の悪さはあったが、自分の力で勝った初めての勝負だ。勝ち名乗りを受け、土俵から降りようとする目の前に北闘湾が立ちふさがっていた。なにごとかと思うと、「頭がくっついている」と応えた。なるほど、最初の激突でお互いの額がめりこんでしまったらしく、顔を離すことができない。しかも「頭がくっついている」というのは北闘湾が口にした言葉ではなく、考えただけのことらしい。

どうしたものかと思ったとたん、腕が焼けるように熱くなった。なんだろうと腕を横目で見ると、上腕の真ん中あたりから骨が突き出していた。腕が折れたのはじいさんの方じゃな

かったのか。そう声に出さずに叫んだが、北闘湾には筒抜けだったらしい。「お互い様じゃ」そう笑いながら応えた。

控え室に戻り、医者はずぶさに調べてから、頭蓋骨が細かく骨折していて、その複雑にはがれた二人の骨の断面が互い違いに噛み合っている。どの順番で剥がしてゆけばいいのかが難しいところだが、それさえ分かれば離すのは簡単だと言った。医者の腕は確かなようで、三十分もかからずに北闘湾の頭が外れた。額に丸く穴が空いて灰色の脳みそが見えていた。自分の額は見る気になれなかった。

それから医者は腕を調べて、上腕骨が二カ所で折れている。見なくても分かるほど、骨が皮膚から突き出している。と言った。医者は、即座に突き出た骨を指で腕の中に押し込んだ。痛みはさほど感じなかった。手首と肘を掴んでぐいと押すと、腕の形はたちまちもとにもどった。晒でしぼりあげてから、これでまあ大丈夫だろうと医者は言った。何が大丈夫なのか分からない。温泉を使えば二時間程で完治するよと、医者はこともなげに言う。信じがたい事ではあったが医者の言う通り温泉の効果は目覚ましく、二時間もせずに骨折は治ってしまった。その二時間の間に、目録は八色の続きを書いた。

工場は地下にあるのだと思います。最初に工場に連れて来られた時は夜でした。一丁目で小さなバスに乗せられて工場で降りるまで、他のバス停には一度も停まりませんでした。バスの窓は真っ黒で町など最初からないみたいでした。工場で降りた時、見上げた空も真っ黒でやはり町はないのだと思いました。工場に来てからは、町などないはずなのに、何度か地図を作りました。地図には鳥の頭のような形をした土地が描かれていて、それだけを見ると不気味です。地図には「い十五」とか「け七十二」とか記号が印刷されているので、手順書の通り記号をペンチで摘み、決まった角度に捻じります。地図の中央に「相撲」とだけ書いた場所があるので、そこで相撲をしているのだと思います。相撲を見たことはありません。大きな体の人が裸でぶつかり合うのは知っています。でも人間だけでなく、土俵くらいもある大きな岩石や、模造紙に描かれた力士の絵も闘うそうです。いったいどうやって闘うのか、ちっとも分かりません。大きな蟹の力士がいるという話も聞きましたが、まだそっちの方が信じられそうです。

工場は地下にあるのだと思います。工場では、作業場所とベッドのある部屋の間の行き来にはエレベーターを使い、それは荷物の搬入搬出にも使う大きなエレベーターで、時々、部品棚にあるのと同じ部品箱がたくさん積みあげられたままになっていることもありました。そんなとき、気づかれぬように箱に手を触れると、箱はとても冷たくて指紋が凍って箱の表面に張り付くのです。指紋だけでなく指まで箱にくっついてしまったら箱が自分を八色だと偽って工場で働き始めるでしょう。そうなったら、ベッドではなくエレベーターの隅で眠ることになりそうです。

お菓子を作ることもありました。小さな力士の形をしたお菓子は三色に色分けされた脳

吐塩を型に詰めて硬く蓋をするだけです。蓋を開けると横角のお菓子になります。これは色がずれていても誰も文句を言わないので気楽でした。商品箱に「のう」と書かれていて、げんこつくらいの大きさで表面にうねうねとした膨らみのあるケーキのようなお菓子は、脳吐相撲のマークを模したものだそうです。脳吐相撲の見物には欠かせないのだそうです。場所が始まると仕事はこれだけになり、一日中お菓子を箱に詰めていました。

もしかすると、こういう仕事をしていたのは指紋と指紋の付いた指を持つ部品箱だったのかもしれない。箱が身代わりになって仕事をしているから、冷たいエレベーターの隅で湿った脳吐塩を嚙りながら、ずっとこんなふうには書きを書いているのでしょう。

注意深く続けている。詳細であったり厳密であったり時として詳細であり同時に厳密でもある。最も注意すべきは最初であることに、勿論気づいている。しかし無知の振りをすればどんどん有利になるだろう。最初などないと信じていると思わせられれば、物事は非常に有利に運ぶはずだ。何も書いてなどいないと信じていられればそれが一番いいだろう。

扉を閉じた時、喪服を着たままだったと気づいた。バスの時間は迫っていてそのバスに遅れると次は二時間待つことになる。扉はそのままにして、喪服のままバス停に向かった。三丁という名前にも関わらず一丁目のバス停だった。一步進むたびに服の左肩が下がるので、何度も首を竦めて肩を戻さなくてはならなかった。バスは空いていて整理券も緑色だったので一番後ろの席に座った。整理券をポケットに入れて窓ガラスに映る広告を見ていた。海にいらっしやい。海は素敵です。深海魚が誘っていた。海に行く時間はあるはずだった。バスで海に行こうと最初から思っていた。最初から降車ボタンを押すつもりだった。バスが減速を始めた。ポケットから取り出した整理券は緑ではなく真っ黒だった。光に当てていないと色が変わってしまう回数券の話は新聞で読んだが、遠い町の話だと思っていた。運転手は整理券のにおいをかいで、喪服の色が移ったねと断言した。振り向いて確かめると今まで座っていた座席も黒く変わっていた。走り続けたバスの後尾からずっと一丁目まで黒い跡が残っていた。

運転手は席から立ち上がり三丁の左の内ポケットを探ると硯を取り出した。やはりな。運転手はすぐにも無線機のスイッチを入れようとする。五分前まで墨を摺っていた。硯は墨を吸って重くどんな服を着ていてもすぐに喪服になっただろう。右の内ポケットにも釣り合う重さの硯を入れるべきだったろうか。正確に等しい重さの墨を吸った硯は見つかるだろうか。前後左右にも均衡が必要なら背中にぶら下げるべき墨を吸ったもつと多くの硯が必要になるはずだ。それほどたくさんの硯を服の内側に装着してバスに乗れば、その時は車体が傾き硯から溢れた墨がバスの床を濡らし道路にまで垂れるからバスの通った後に黒くどこまでも長い川を残すだろう。そのようにして、一丁目から海まで続く黒い川が作られたのだろう。これからは誰も道に迷わないことになる。この場合、道ではなく川に迷わないというべきかもしれない。

運転手はバックミラー越しに一丁目まで続く墨の川を見ると、これでは首になるなど言い、無線機を使わず運転席に戻してからバスを降りて、一緒に歩き始めた。海に行くのかと尋ねると、運転手は海に行くだろうと答えた。海が本当にあるとは知らなかった。空がそんなふうに見えるだけだとずっと信じていた。運転手はそんなことを話し、悔しそうに唇をすぼめていた。午後の日差しは思ったよりも強く国道には真っ白な平べったい石がたくさん落ちていた。「海へ」と書いた看板が立っていたので国道から離れることにした。運転手は、「海へ」というのは「海へは行けない」という意味だと主張し、国道をそのまま歩いて行った。運転手の姿が見えなくなると、風は吹かなくなった。これが凧というもののだと、自分の幸運を喜んだ。そこからは、どれだけ大きな声で呼んでも、運転手には聞こえなかつただろう。風がないということは、時間が止まるということだ。時間が止まってしまわないように、船長の続きを想像し続けた。

朝になると裏裏裏港の管理局から連絡が入り最近のことだが海に紙幣を撒く者がいて市民を混乱に陥れようとしているから注意するようにと伝えられた。海に金を撒くとはずいぶん豪勢だなそれとも偽札というわけかね。本物だからたちが悪いこれはれっきとした犯罪である。無線が切れる前に管理局の職員は昨夜傍観丸が出港し夜半を過ぎる頃から傍観丸とは連絡が取れなくなっていると伝えた。間違いようもなく先を急いでいた男が傍観丸を雇って出航させたのだろう。海で何かを見つけたら知らせるようにとも言った。裏裏裏港での新しい乗客は十一人の予定だったが一名が出港に間に合わなかった。

裏裏裏港を出ると海は凧になり飛行できなくなった海鳥が船の甲板に落ちてきた。海面に紙幣が浮かんでいるのを発見した者にはその半分を与えると知らせたら乗客たちは先を争って甲板に並んだ。中には私服に着替えた乗組員も混ざっているようだった。陸側よりも海側に人気があるのだろう船が海側に傾き航路が少しずつ陸から離れていると気づいたのは昼も過ぎた頃だった。そしてそれまでの間一枚も紙幣は見つからなかった。待ちくたびれた乗客は食事や休憩のため自室に戻り始めた。船長は胸のポケットから紙幣を一枚取り出しテーブルの上に広げて皺を延ばした。船尾で見つけたその紙幣に描かれた少女の横顔には見覚えがあった。傷心の船旅で彼からの手紙を破り海に捨てていたその少女の名前は八色だったはずだ。船長はあわててノートを取り出し八色の話を書き続けた。

工場に来て何度か昇進を繰り返して作業室もずいぶん地下深くになりました。随分以前から地下の深さは空気の重さで分かるようになっていきます。一日中身体が重くて、歩くことも手を動かすこともゆっくりとしかできないのです。それでも仕事をしたいという気持ちは日増しに強くなっていて、どんなに苦しくても一日の割り当てをこなさなかった日はありません。地下も深くなると重要な仕事を任されることも多くなり、そんな時はとても誇らしい気持ちになりました。

一番よく覚えているのは、脇差という小さな刃物を飾り箱に入れる仕事の事です。刀に直

接手を触れないように、ゴムの手袋をしました。手袋をするとき、緊張していたので二つもダメにしたほどです。息を吹きかけないようにゴムのマスクもしましたので、すぐに息が苦しくなって身体が震えました。箱の蓋を開け、手袋を着けてマスクをすると、震える手で刀の柄をつまんで箱に納めてから、ふたたび蓋をしました。他にも何かしたような気もしますが、息が満足にできなかつたので、よく覚えていません。いつもと違い、部品棚の箱は脇差し一つしかなく、それでそれが貴重なものであると分かりました。

脇差の梱包ほど重要な仕事はそうはありませんでした。もう一つだけ思い出すのは、横角の化粧廻しくらいです。部屋よりも大きな布は親指ほどの太さの糸で編まれていてそこに図案通りの絵を刺繍しました。何の絵なのか完成するまで分からないように担当の部分だけしか図案は与えられません。部分だけなので全体の意味は分かりませんが、夜空に脳の模式図が浮かび、骨だけになった魚がそれを食べようと口を大きく開けている。そんな絵のように思いました。与えられた図案は脳の上のほうの角と、魚の骨の尾の一部です。担当部分を完成させるまでに二度、作業室を変わりました。化粧廻しを運ぶのは誰も手伝ってくれるわけではないので、大仕事です。腕や背中に痣や擦り傷がたくさんできました。痛みはそれほど感じませんでした。重要な仕事をしているのだから、それくらいは当然です。ただ、指を切ってしまい人差し指が動かなくなったときは困りました。眠る前に書いていた力士の続きが書けなくなったからです。

目の前に立つ減ヶ岳は、他の力士も皆そうであるように、目飲になど興味がないという表情で土俵に立ってる。それよりも客席の方が気になるようで、客席の同じあたり繰り返し振り向いてみつめていた。それも何かの策略かと思いつつ、目飲がその視線の先を見ると、子供達が何かを囲み夢中になっているようで土俵に背を向けている。わざわざ土俵の間近に来ていながら取組みに背を向けているなど、目飲には信じられなかった。

減ヶ岳は五歳のときに相撲と同時にマスターベーションを覚えた。きつく締められたまわしにこすられたペニスに痒みをおぼえ、股間を弄っていると快感に襲われてそのとたん手に生ぬるいものがついていた。病気かもしれないと思ったが、誰に言うこともなく、相撲の練習が終わりまわしを一人で外す時間が楽しみになっていた。誰かがまわしを外すのを手伝おうとすると、泣いて拒んだ。十歳になった頃には、まわしをしていない時にもマスターベーションができるようになっていて、一日に五回射精しなくては、落ち着かなかつた。何回できるか試したときは、十二回目で気を失ったが、たぶん、あと十回はできるだろうと思った。

十二歳の夏、左手で睾丸を揉んでいたら、夢中になりすぎて思わず睾丸を潰してしまった。しまったと思ったが、それはこれ以上マスターベーションを続けられなくなるかもしれないという怖れのせいだ。そのときは、二日ほどで睾丸は元に戻った。元に戻れば、睾丸がつぶれ後悔したことなど忘れてまたマスターベーションに精を出した。知らない間に握力がついていたので、それから一年の間に何度も睾丸を握りつぶし、数日で元に戻るということを

繰り返した。一年たった後にようやく、睾丸が以前よりもずいぶん小さくなってしまっていることに気づいた。少しずつ変化していたので気づかなかったのだ。ただ、もっと早くに気づいていたとしても、マスターベーションをやめる事はなかっただろう。

十四歳で相撲取りになった。潰れた睾丸は、体内に吸収されたのか触っても何も手応えがなく、そこに何かがあったという痕跡もなくなっていた。それと同時に、体つきがふっくらとして、乳房も大きくなっていたが、相撲取りなので誰もそれをおかしいとは思わなかったようだった。眠る時間になると左手を握りしめ、親指だけを伸ばして、自分の肛門に突き立てる。そうすると、落ち着いてぐっすりと眠れた。次の日の朝、目が覚めると決まって、その親指を口に咥えて目覚めるのだった。親指は脳吐塩よりも甘く、しかも舌を突き刺すような刺激があつて、目を閉じたまましばらくは親指を味わい続ける。眠っている間、どんな夢を見ていたのかはすこしも思い出せなかった。

力士になった減ヶ岳は相変わらずマスターベーションを続けており、兄弟弟子もそれを知っていた。一日中、精液のにおいが身体から漂い、他の力士達は減ヶ岳と組み合おうという気持ちにならないようで、組んでもすぐに負けてしまう。勝ち星が増え、減ヶ岳は幕内力士に名を連ねるようになった。幕内ともなると減ヶ岳に簡単に負けるような力士はいないが、どうにも苦手だという者は多かった。減ヶ岳は立ち会いに負けた夜にはいつもより激しくマスターベーションをし、自らの精液に濡れた指でペンを使い、船長の続きを書く。

前任者の行方が分からなくなったという連絡があつてから、あらゆることを詳細に記録している。注意深さが最も重要であることを理解しているからだ。これがまだ十分に注意深くないと言うのであれば、それは言語というものを使っていることの限界としか考えられない。言語であれば言葉と言葉の間や文字と文字の隙間が必ず存在するのであり、その隙間を埋めるに足りるほど微小で繊細な認識は存在し得ない。その隙間に何者かが潜み、意識の途切れる時を待っており、注意深さを失えばその時、その何者かは我々の存在をも奪うだろう。なんらかの対策が必須なのである。という報告を読んだ事がある。書いたのは前任者だった。つまり、そのような妄想に取り付かれた者は行方不明になるということなのだろう。妄想から身を守ることにこそ注意深くなくてはならない。

連絡を受けて指定された事務所に急いで向かうと、すでに前任者の残していた私物は運び出されていたらしく、きれいに消毒された机の上に「三丁」とだけ書かれた名札が置かれていた。それで、三丁と名付けられていることを理解した。名札は、これとって特徴がないのにもかかわらず、名札以外のものには見えない。椅子に座り名札を手にとり服の胸のあたりにつけた。案内してくれた若い案内係はその行為を見て、あわてて自分の席に戻って行った。名札から視線をそらし、口元を手で隠していた。引き出しを開けると半紙、硯、筆が用意されていたので机の上に並べ、給湯室からコップに水を入れて来て墨を擦り始めた。三丁の仕事と言えばこうして墨を擦り、半紙に報告書を書く事だけだ。初仕事は前任者の失踪についての

報告ということになる。前任者については、失踪したことしか知らなかったの、半紙には「前任者が失踪」とだけ書いた。筆先が紙面から離れるとき、誰かが大きな声をあげた。声は案内係の男だとすぐに分かった。泣いていたからだ。こんな場所では仕事はできないと悟ったので、半紙、硯、筆を上着の内ポケットに入れて、事務所を出ることにした。椅子から立ち上がると、注意深くなくてはならないという言葉思い出した。勿論注意深くなくてはならない。机に突っ伏して顔を隠したままの案内係の肩に手を置いて、船長の話続けるように促した。

エレベーターにはそれ以上下の階はありませんでした。それ以下の階というのが正しいでしょうか。身体はどこもかしこも重く少しも動かさず。指も動かないし、瞼を開けることも難しいのです。心臓さえ動かなくなり酸素の不足した頭は、ただ仕事をやり遂げなくてはならないという熱意だけで一杯になっていました。動けなくてエレベーターの床に横たわったまま、ドアが開いたり閉じたりするのをずっと見ていたのです。どうしてエレベーターの扉が上と下に開いたり閉じたりするのだろうと、ずっと考えていました。自分が横になっていたためにそう見えるだけだと気づいた時はすごく嬉しかった。笑いたかったけれど、力がどこにもこめられなくて、すこししゃっくりのように腹が痙攣しかけたただけでした。それから、もう働けないのかと思うとくやしくて、泣きそうになりました。でも涙をこらえて床の上を這いずってエレベーターから外に出たのです。長い時間がかかりました。そうしてようやくエレベーターをでた時には、もう仕事の時間は終わっていました。力士の雪駄を一足づつ藁で縛る仕事です。脳のマークのシールも貼らなくてはなりません。だれも代わりに仕事をしてくれるわけではないので、残業をしました。何時間働いたのか。地下の一番下では、多分、時間は淀んでなかなか進まないと思います。暗くて、廊下の先がどこに通じているのかさえ見えませんから。進まない、時間の停止している隙間で力士の続きを書きました。

裏裏裏裏裏裏港には午前中に入港できた。次の裏裏裏裏裏裏港と裏裏裏裏裏裏港は地図の上でも最も遠い隣接港で朝出発しなければ夜も海上にいることになるだろう。乗客達はすでに海上の紙幣を大量に見つけていて裏裏裏裏裏裏港の賭博施設を楽しみにしていたから早く寄港したことに不平を言うものはいなかった。一週間ほど滞在すると言い下船することに決めた客が三十人ほど出てきたので代わりに客を見つけるのに苦労するだろう。財産をすべて失い船賃さえない者を乗船させるわけにはいかない。海に撒き散らされた紙幣の下には破壊された船と何人かの死体も発見されている。船の破片には「傍観丸」という文字も見え死体の一つはあの先を急いでいた男だった。海では死体は海水に水分を奪われ乾き切った骸になる。もともと風船のように太っていた男はやせ細りこれはタツノオトシゴの一種だと言われればタツノオトシゴのことを知らなくてもそうに違いはないと思っただろう。死体はどれも一度力づくで手足や首や胴体を引きちぎったあと慌てて元に戻そうとしたように不揃いな縫い目があった。

レストランを訪れると手紙を海に捨てていた少女が新しい恋人を見つけていた。相手は顔はよく見えなかったが大きな身体で、よほど体重が重いのだろうテーブルも椅子も今にも碎けてしまいそうにぎしんでいた。キモノを着て髷を結っているのはかなりの相撲好きなのだろう。相撲取りであるというだけでもはやされるから太った男はみんな相撲取りの真似をする。その髷がカツラだということは遠くからでも分かった。手作りでなければ十中八九脳都興産の製品だ。少女と青年はお互いの瞳を見つめ合ったまま何も話していない。なるほど青年がカツラだということに気づくはずがなかった。近くのテーブルの女達もその太った青年をちらちらと見ている。本物の相撲取りはこんなレストランには来ない。もっと船の深いところにある彼ら専用のレストランに行くことになっている。彼らの食事は大量でありこの厨房ではまかないきれないからだ。時々食事以外のものを食べたいとなると彼らは人々の前に姿を現し気に入った娘を啄んで行く。その点については、偽物の相撲取りならば心配することはないだろう。レストランの隅のテーブルに座り船長は三丁の続きを書き始めた。

目の前に立つ牛叩は、額を相手の額に押し付けるように近づけ、睨みつけた。行司は額が触れる直前にその間に軍配を差し入れて制した。観客席が湧いた。牛叩は怒ったように眉を寄せ、塩を力一杯投げつけた。相手の力士には届かなかったが、土俵の外に飛び散った塩は観客の頭にも降り注いだ。観客は大喜びだったが、親方たちは難しい顔をしている。仕切り線に手をつき、行司が「つきよ」と叫んだ瞬間、牛叩は自分が控え室の畳の上で寝ていることに気づいた。夢だったのだろうか。夢でないことは、脇腹と肩に熱い痛みを感じたので分かった。手で触れると指に自分の血がついた。血を見て怯えることはなかったが、どんな技を使えば力士の腹を切り裂くことができるのだろうかと思った。あの子の対戦相手が誰で、立会いがどう展開したのか、どんな技が使われたのか、何一つ思い出せなかった。ただ、牛叩は相手の目だけを覚えていた。白い部分のないその目は丸く、牛叩の顔を真っ直ぐ覗き込んでいた。目をそらしたら負けると感じたので睨み返した。だがそのせいで反応が一瞬遅れ、相手の足砕きをかわし損ねた。

一瞬の後、牛叩は相手が自分のずっと上に立ち、その時はもうその黒い目は見えなくなっていることに気づいた。視野が闇の底に沈んでいくにつれ、牛叩は相手の目のことを忘れて行った。そして、気を取り戻したあと、相手のことは何一つ覚えていなかった。

土俵の上で腹を切り裂かれた力士のことは新聞で大きく取り上げられた。切り裂いたほうの力士については何の記事もなかった。そんな者はまるで存在していなかったかのようだった。

彼は夜毎、若い女を連れて店にくる。毎日、違う女だ。よくもてますねと話しかけると、醜い顔の力士というものは、かえって女に持てるものだと笑う。女は彼の硬い腕にしがみつくようにして店を出てゆく。その腕は彼が力を緩めれば海の水のようにやわらかくなる。広い部屋には家具らしい家具はなく、石油ストーブに染み付いた灯油のにおいが、返って寒さを

感じさせる。部屋にはいると彼は連れてきた女を乱暴に床に投げだす。女は大抵驚いて文句をいうが、自分を見る彼の視線に気づくと怯えて何も言わなくなる。部屋に散らばった新聞紙や広告の皺くちやに丸めた屑やプラスチックの袋、それに喰いさしの生の魚やネギの切れ端が腐ったにおいを放っている。女にはそれだけで、その部屋がおかしいと気づく。突然、彼が大きな声で吠えたり、女に向かって突進して、目の前で止まると笑いだし、離れてゆく。理解できない恐ろしさに怯え、女はたいてい泣き出すか、ぼんやりとして何も反応しなくなる。「ははああ。漏らしたな。しょんべんのおいがする。可愛い顔してこぼしたな。うあはは」

彼はうれしそうに顔を近づけ、女のからだ中のおいを嗅ぐ。避けようとしても女にはもう抗う気力はない。彼は硬直して膨れあがった性器を着物の裾から直立させ、女にのしかかる。男根はナイフのように女の身体を突き刺し切り裂く。女の身体から赤い血がほとぼしり、床の上に落ちていたノートの開かれた頁に落ちる。それは偶然にも文字の形に固まり、三丁の話の続きになる。

身体が少しも動かなくなっていて働くことができなくなったのでずっとベッドの中です。仕事をしたくてたまらないから、腕を動かそうとし足を動かそうとし心臓が強く鼓動するように息を深く吸い込もうとするのですがうまく身体は動きません。仕事をしなくてはならないのです。工場を止めてはいけないのです。

工場には大きな機械は何一つなくて働いているのがまるで自分だけのように他の工員とは会った事がありません。それでも、この広い工場のどこかに大勢の仲間がいて同じ製品を作るためにがんばっているのだと思います。通気口から聞こえる微かな低い機械音や一日のうち何度か漂って来る食事のにおいで、それが分かります。工場に来てから、自分自身が工場になるように育てられたのかもしれませんが。そんなふうには考えた事はありませんでしたが、こんなに働きたいという気持ちが強くなったのは、工場になったからではないでしょうか。

それでは何故、もう働けなくなってしまったのでしょうか。こうしてベッドで横になったまま何もできないでいることが、何かを生産しているというのでしょうか。答は三丁にあるような気がして、また三丁の続きを書き続けます。

前任者は海に行くと言って事務所を出たと報告されていた。それでは行方不明などではなく行方明瞭というべきではないだろうか。確かに、本当に海に行ったのかどうかを確かめなければ行方明瞭とまでは断定できないだろう。それでも、海に向かう道は一つしかなく、海も一つきりしかあるはずがない。さらに路線バスに乗っている前任者の姿は何人もの目撃があり、バスの運転手とともにバスを降り海へ向かって歩いて行ったという確かな情報もある。つまり、国道に残された前任者の真っ黒な靴跡のことである。海に続く道はやがて国道から分かれ、足跡はその道を辿っている。丁度、国道と海岸の中間地点にある理髪店で髪に手入れをした理由は分からない。理髪店を出る頃にはすでに夜であり、前任者が物陰に隠れている

のを、巨大な深海魚を抱えた女が見ていた。最後に目撃されたのは海岸で砂の山を作り、大きな穴の中に入って行く姿だった。あるいは、気を失っているらしい前任者を砂の穴に埋める何者かがいたという報告も多い。砂山があまりにも巨大だったので、そんなに大量の砂があれば海を埋め立てることさえできただろうと言われている。つまり、前任者は海をも埋め得る大量の砂の下に埋められ、身動きもできないのだろう。となれば、改めて、前任者は行方不明者などではなく、行方明瞭者ということになる。ただ、砂に埋れているから動きが取れず連絡できないのであれば、行方不明と呼ばれてもしかたがない。となると、前任者の行方を明らかにすることこそ三丁の二つ目の仕事であると言えるだろう。三丁は前任者を砂の下から発掘するため、海に行くことにした。バスの時間は迫っていた。バスに乗り海岸に着くまで、三丁の続きを書く時間はたっぷりあった。

濃い墨の線が事務所から海岸まで続いていた。墨で描かれたバスのタイヤの跡はぬめり、その上を通る車を滑らせ次々と歩道に飛び込ませている。病院の救急医療室は簡易ベッドも医療器械も壁も窓もすべて真っ黒で、昼でも電灯をつけなければ何も見えない。黒衣を着た医者指差すままに、窓から外に出ると、壁を伝って町の中心から海へ向かう墨の跡が続いていた。床屋の建物は黒い砂に半分埋まり、国道には黒く大きな魚が何尾も横たわって、最後の息をしようとしていた。道に迷う事は不可能だった。砂浜では墨が砂に吸われてまだらになってはいたが、大量の砂の盛り上がったあたりまで、ちゃんと辿り着くことができた。この砂の下に前任者はいるのだろう。

はじめは両手で砂を掘り始めた。指の爪の間に砂が入り込み、爪が剥がれるように痛んだが砂山の砂は少しも減らなかった。痛みがこらえられず硯を使って砂を掘り続けた。硯に墨が残っていたらしく砂山から波打ち際までの砂の色が黒く変わった。硯は砂を掘るのに適してはおらず、脇腹や背中の中心の筋肉などが痛んだ。それでも砂浜の砂を手にとっては口に入口と、その甘みが身体の疲れを忘れさせてくれた。やがて、砂の間から右腕と頭部が現れた。急に右腕が軽くなり人差し指が動いた。少しも動かさないほど強く抑え込まれていた右腕が動かせるようになった。頭の回りの砂を掻き出すと、肩や反対の腕も順に解放されていった。指や鼻など身体先端から砂に変わり始めている前任者の両腕を掴んだ。半ば砂に変わりかけた腕が崩れなかったのは幸いだった。両腕を掴まれ砂の中から引きずり出された。腕に触れた時、砂とは違う温かさを感じた。全身が砂の上に引きずりだされるまで、いく度も力を込めなくてはならなかった。腰が抜けると後は簡単な仕事になった。砂から自由になると砂の上に仰向けにされた。爪先が痺れていた。足や腕だけでなく、腰も腹も背中顔も頭もが痺れるのだと初めて知った。唇や舌が痺れていて何も話せなかった。耳が痺れていて何も聞こえなかった。頬が痺れていて、微笑みさえ浮かべられなかった。これまでのこともほとんど思い出せなかった。痺れはやがて痛みとなり、全身の無数の細胞が痛み、細胞というのは決して自分自身ではないことを思い知らされた。こんなことだから砂の中にも一生を終

えたるがよくなったのであるとも思った。

このように詳細な記録を残す事が義務づけられている。十分に詳細な記録であることを期待する。そのためにここで記録を終えるだろう。ここから先は何も記録されない。記録されないことは存在しないのだと誰かが言った。